

アレルギー性疾患におけるヒスタミン研究の新展開

赤木正明,^{*,a} 福井裕行^b

New Development of Histamine Research on the Inflammation

Masaaki AKAGI^{*,a} and Hiroyuki FUKUI^b

^aDepartment of Pharmacology, Faculty of Pharmaceutical Sciences, Tokushima Bunri University, 180 Nishihama Houji, Yamashiro-cho, Tokushima 770-8514, Japan, and ^bDepartment of Molecular Pharmacology, Institute of Health Biosciences, The University of Tokushima Graduate School, 1-78-1 Sho-machi, Tokushima 770-8505, Japan

ここに記載されている総説は、2010年3月28日に岡山で開催された日本薬学会第130年会でのシンポジウム「アレルギー性疾患におけるヒスタミン研究の新展開」という演題で行った発表のうち3演題の発表内容をまとめたものである。

ヒスタミンは、抗原-抗体反応により肥満細胞から遊離される即時型アレルギー反応の中心的なメディエーターの1つと考えられている。遊離されたヒスタミンは、H₁、H₂、H₃、H₄受容体を介して浮腫、平滑筋収縮、分泌亢進、かゆみなどを誘発する。これまでに、アレルギー性疾患に対してヒスタミンH₁受容体拮抗薬が臨床応用され、即時型アレルギー反応におけるかゆみ、浮腫等や、アレルギー性鼻炎においてある程度有効性を示してきたが、まだ満足できる状況ではない。最近、ヒスタミンH₄受容体が注目されるようになり、ヒスタミンH₄受容体拮抗薬のアレルギー性疾患に対する臨床応用が考えられるようになってきている。そこで、本シンポジウムではヒスタミン受容体拮抗薬について精力的に研究されている4名の方々、水口博之(徳島大)、平澤典保(東北大)、矢野春奈(岡山大)、山内広平(岩手医科大)に、1) 疾患感受性遺伝子の1つとしてのヒスタミンH₁受容体遺伝子について、2) アレルギー性皮膚炎症におけるヒスタミンH₁受容体拮抗薬とヒスタミンH₄受容体拮抗薬の併用による新しい治療戦略について、3) アレルギー性鼻炎治

療におけるヒスタミンH₄受容体拮抗薬の新規治療薬としての可能性について、4) ヒスタミン受容体拮抗薬の気管支喘息治療薬としての可能性について、それぞれ最新の情報を紹介して頂き、ヒスタミン受容体拮抗薬の新たな治療的意義について徹底的に討論を行った。そして、新規性に溢れた研究成果が披露され、今後の新規治療薬の開発展開の発火剤となる活発な討論・意見交換ができ、また、シンポジウムに参加して頂いたの方々にとっても充実した時間を共有することができた。

本シンポジウム並びに本誌上シンポジウムを通して、臨床を見据えた基礎研究の重要性について各々の意識が高まることができたのであれば、本シンポジウムが意味をなすものと考えている。臨床を見据えて行う基礎研究とそれに基づいて成り立つ臨床との相互の密接な関係を考えるときに、これをもっと強力なものにすることの重要性を意識している一人として、本シンポジウムが薬学のさらなる発展に寄与できることを期待したい。

最後に、本シンポジウムの開催並びに本誌上シンポジウム執筆にあたり、貴重な機会を与えて頂きました日本薬学会第130年会組織委員長、土屋友房教授、並びに終始丁寧なご指導を頂きました日本薬学会役員の先生方、スタッフの方々、そして今回参加頂きました各大学及び各施設の先生方並びにご尽力頂きました関係各位に、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

^a徳島文理大学薬学部薬理学教室 (〒770-8514 徳島市山城町西浜傍示 180), ^b徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部分子情報薬理学分野 (〒770-8505 徳島市庄町 1-78-1)

*e-mail: akagi@ph.bunri-u.ac.jp

日本薬学会第130年会シンポジウム S48 序文